

季節のことは

肌を撫でてゆくところよい風。若葉を波打たせ揺らぐかす風。まるで風が光のように見えるから「風ひかる」という。春は眠たいもの。そよ風をあびて机にむかえばたちまち恍惚の睡魔にさそわれて身をまかせ。どんなに花粉症でお悩みのあなたでも春の睡魔にはおとなしく身を任すでしょう。電

車の中で、今も大きなマスクをつけたまま気持ちよさそうに居眠りしているOL美女を見た。木の芽どきは体調の変化にご用心。たけのこの季節になると歯医者かよいをした日々を思い出す。やがて麦秋。麦が黄色にうれるというそんな風景は見られないけれど、言葉だけでも残しておきたい。

Makasa NEWS

三笠ニュース

PR情報/年4回発行

発行所 三笠産業株式会社

郵便番号101-0064 東京都千代田区猿樂町1-4-3
電話03(3292)1411 大代表 ファックス03(3233)0530

Makasa MT-55 タンピングランマー

21世紀の世界標準!

ご好評を頂いております三笠のベストセラーMT-52FW型タンピングランマーが21世紀を迎え、装いも新たに生まれ変わります。

従来機より定評のありました操作性の良さを更に向上させ、作業現場を熟知した三笠産業ならではの新しいアイデアをふんだんに盛り込み大幅な作業性の向上を実現しました。

環境に優しいOHV 4サイクル

エンジン搭載

エンジンは従来機より定評のありました燃焼効率の良いOHV 4サイクルエンジン、ロビンEH09を搭載（米国EPA排ガス規制適合品）。2サイクルエンジンに比べ、排気ガスの臭い、白煙が少なく音も静かな、環境に優しいエンジンです。エンジンの両サイドには、リンク類やオイルゲージ等のエンジン補機類の破損を防止する為、大型カバーを標準装備しました。この大型カバーはランマー本体のクランクケースとエンジンを連結し、左右の張り出しを最小限に留めたスリムな形状で、溝の中でも壁際まで機体を寄せる事が出来ます。又溝の中で方向を変える際にも小回りが効くような形状としました。

新規設計専用ダブル

エアークリーナー搭載

三笠が国内で初めて実用化したランマーのダブルエアークリーナーシステムは競合メーカーのほとんどが追従することとなり今やランマーの標準仕様

型 式		MT-55
機体寸法 mm	全 高	1,010
	全 幅	370
	全 長	670
衝撃板の寸法 mm	幅×長さ	265×340(前部をカットした6角形)
装備質量 kg		57
衝撃板のストローク mm		30~70
打撃数 min ⁻¹ (毎分)		600~695
打撃力 毎回kN(kgf)		7.4~9.8(750~1,000)
燃料タンク容量 ℓ		2
エンジン	型 式	ロビン EH09 OHV式 4サイクルガソリンエンジン
	最高出力 kW/min ⁻¹ (ps/r.p.m)	1.8/3,600 (2.4/3,600)
	燃 料	無鉛レギュラーガソリン
	潤 滑 油	自動車用エンジンオイル SE級以上



備品と成りましたが、この度の新型MT-55ではダブルクリーナー（プレクリーナー）も新設計の樹脂性とし、クランクケースと一体構造にしました。このプレクリーナーは三笠独自の方式により、重いゴミをランマーの振動で自動的に振るい落とす事で、軽量、コンパクトながら従来と同等以上の集塵性能とメンテナンスフリー化を可能としました。メンテナンスの際はクリーナー中央部のノブを緩めるだけで、容易に着脱が可能です。

更に新設計の吸気システムの採用で、雨水の浸入を防止しました。

新規設計 6 角形高強度

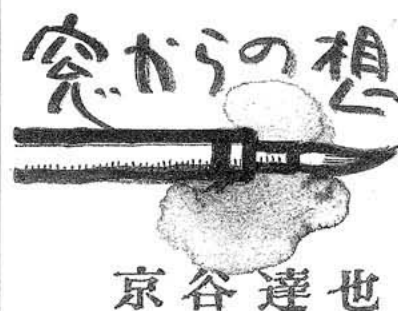
専用フート採用

フートはMT-52FWで話題となり

ました形状に更に改良を加えました。三笠独自の輾圧安定理論に基づいて設計された専用フートは今回新たに高強度特殊鋼を採用、大幅な耐久性の向上と安定化を図りました。更に硬い路盤での確かな安定性はそのままに、コーナーをしっかりと締め固めたいというお客様のご要望にお応えしてカットは前端のみとし、後端をまっすぐな形状と致しました。

マン・マシンインターフェース
(人と機械の接点)の向上

人に優しい機械づくりを目指す三笠は作業者と機械の接点であるハンドルや調速レバーにも今回大幅な見直しを行いました。



京谷達也

江戸博こと江戸東京博物館で「蕪村展」が始ったとき、これは見ておこうと心にきめて楽しみにしていた。しかし、はっと思い出した時はすでに後の祭り。光陰に閑守なし。四十日間もの開催に安心し胡座をかいて悔いを残したことになる。

今回の「蕪村展」は俳人よりも画人にウエートをかけて、その画風の遍歴を展示したものらしい。わが社の創業先代はあのダイナミックな実業経営のかたわら作句にうちこみ、句集も俳画も多く残している。不肖わたしは腰折れの一句すら作ったことがない。いや、作句はしても発表できる名句がないのだといっておこう。だから常に賞味の側についている。とりわけ好きなのが蕪村で、そのイメージはときに近代の象徴詩をも越えていると感じる。又ある時にはフランスやイギリス文芸の名作を連想させる句に出会えるのも蕪村ならではのである。

萩原朔太郎が詩人の鋭い直感力で蕪村の作品にただよう“郷愁”を発見したのは昭和初年のことだ。あれくらい蕪村学者がふえたようだが、しかしいっこうにその成果はみられない。つい先年ようやく高橋庄次著『月に泣く蕪村』（春秋社）でわが意を得た喜びにひたった。

「春風や堤長うして家遠し」の有名な「春風馬堤曲」をこれほど丁寧かつ美しく解説した論文もはじめてだろうし、「老いが恋わすれんとすれば時雨かな」の経緯もくわしく知ることが出来るのだ。

「菜の花や月は東に日は西に」の句にも根深い“郷愁”が指摘されており、目から鱗とはまさにこれと痛感したのだった。

防振ハンドルの採用

ハンドルは周辺の構造を見直し第三の防振ゴム（ストッパーゴム）を採用することにより、作業中はあくまでソフトな手元振動を確保、運搬時にはストッパーゴムの働きにより従来と同等の操作性を実現しました。

新設計オリジナル調速レバー採用 (アルミダイキャスト製)

調速レバーは三笠オリジナルの新型ダイキャスト製レバーを標準装備しました。

ラック&ピニオン方式の採用で、滑らかな操作性を約束するとともに、本体を密閉構造とし、ホコリや雨水をシャットアウトしました。この新型調速

レバーを採用することにより調速ワイヤーの寿命も向上し従来ランマーの故障で圧倒的に多かったアクセル関係のトラブルを大幅に減少させることが出来ました。

作業性の向上

本機は調速レバーを調整する事で、ジャンプ量と打撃数を調整する事が

出来ます。軟らかい路盤、アスファルト等の硬い路盤等、輾圧面の条件に合わせて、又作業者の好みや現場の状況に合わせ様々な使い分けが可能です。

この他にも様々な改良ポイントが多数ありますが紙面の関係上割愛させて頂きます。

まずは一日も早く実機にてご確認下さい!!

このように、新たな機構・装備を盛り込み、優れた機体の安定性と強い輾圧力を両立させ、操作性を向上させましたMT-55型ランマーを、従来のランマーと同様に御愛用頂きますよう、御願い申し上げます。

オランダ ラスベガス 米国出張記…ARA SHOWとWOCの旅…

建設機械業界にとって恒例の展示会の幕開けである。今年は、2月の最終週の26日よりオランダで第45回ARA SHOWが、また27日よりラスベガスでWOC(ワールド・オブ・コンクリート)がそれぞれ4日間の日程で開催された。WOCには弊社からは京谷社長を始めとして、十九浦館林工場長、清水海外営業部長と私の4名が、そしてARA SHOWには私がそれぞれ応援に駆けつけた。

私は、一足先に前週の土曜日の夕刻にグラス経由でオランダ入りした。今回2つの展示会が同時期に開催される為、代理店であるマルチクイップ社ではセールスマンが東西半々に分かれて展示会に望むこととなった。開催日の前日の午後から、会場で入念なミーティングも行われ、展示会価格、支払条件、目玉商品、グループごとに分かれた商品説明会や接客の方法など細部にわたって打ち合わせが行われた。来店者に接する際に、よく耳にする「MAY I HELP YOU? 何かご用ですか」という言葉を使う事が禁止され「THANK YOU FOR YOUR STOP AT OUR BOOTH. 私どものブースの前で足を止めて頂きありがとうございます」で始まり、「私どもの商品の中で興味をお持ちになったものがございませうか。」と続き、更にお客様が求めて



ARA開催直前の商品説明会

いるものを見つけて差し上げる。と言うように日々の営業活動の中で忘れられがちな事も細かく指示が出される徹底ぶりだ。

そして、翌朝10時の開場と同時に来場者が一斉に押し寄せ、まずは順調な滑り出しに見えた。昨年はこの展示会に合わせて弊社よりMVH-702DSRC大型前後進コンパクターやMVC-88GHプレートコンパクター、そして4サイクルランマーのシリーズ化等々目玉商品を数多く展示したが、今年はそれら製品の熟成時期である為に昨年と同じ商品ラインの展示となった。



WOC会場にて記念撮影

昨年の秋口より米国の景気後退が進み、年明けには深刻さが増しているのも事実である。5年に亘りアメリカの強い経済力がイメージ化されてきたものの、近年ARAの来場者や参加企業の売上は決して伸びているとは思えない傾向にある。メガレンタルの台頭や拡大が急速に進み、本来のアメリカンレンタル協会(ARA)構成員の商談機会という出展者側の意義が失われつつある事も否めない。集客力の減少は、初日と言う事を差し引いたとしても、出展者側セールスマンが来場者を上回っているような状況として現れ、特定の小間を除いてセールスマンばかりが目立っていた。出展者同士が偵察しあう姿が多く見られる一方で、MQ社セールスマンの熱気に浸り同社が代理店であると言う幸いに感謝しながら、翌日ラスベガスのWOC会場へ移動した。

定宿となるリビエラホテルは、ラスベガスで最も古いホテルの一つである。だからと言って正面玄関に入って、いきなりエレベータで上に上がり、ジャックボットの並んだ先にすまそうにフロントが佇んでいていい訳がないと思うのだが。また、鍵を貰い部屋を探してスーツケースをゴロゴロ転がしながら、両側にあるカジノテーブルの真中を歩いていくのにも少々勇気がいる。本当にここを歩いて良いものかと不安を感じさせられたのが、ホテルの第一印象となった。

東西に分かれた今回の展示会は、移動だけで8時間(時差を差し引いて5時間)もかかり、WOC入場券を預かる私としては一刻も早く合流しなければと焦る気持ちをよそに、結果的に合流

できたのは昼を大分過ぎてからとなった。社長一行はと言えば、朝の9時前にJAL便でラスベガス入りしたものの、チェックインで足止めを喰い重い手荷物を抱えて早朝のラスベガスを探索させられたと言う後日談を聞く事となった。旅の疲れはほぼ互角といったところかも知れない。ウッシッシ……。

WOC会場はホテルから近いという話を聞いていたので歩いて行く事になった。しかし、ここはラスベガス。歩けどもなかなか目的地のコンベンションセンターに着かない。対象物が皆大きく、近くに見えても距離はたっぷりあったのである。ひたすら歩いて20分。漸く入場口に辿り着く。個人的には初めてのワールド・オブ・コンクリート(WOC)である。イメージしていたものよりも規模が遥かに大きい。その規模は一昨年ここで行われたARAショーの数倍で、コンベンションセンター全体が会場となっている。毎年出展者

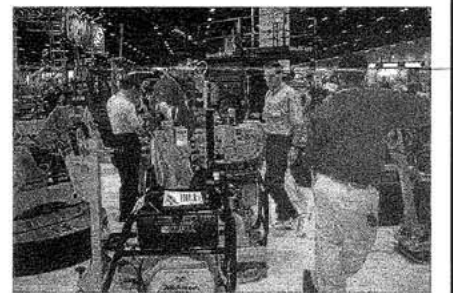


WOCでお客様がトロウエル試し乗り

が増え、今年は約7,500社が展示しているそうだ。早速小さくて見にくい小間割り表(アメリカ人には老眼の人がいないのかと思える程である。まあ、そんな事はないだろうかと?)を見ながら、やっとの思いでMQ社のブースに辿りつき、挨拶もそこそこに遅い昼食を済ませて到着初日の会場を後にした。WOCは読んで字のごとく、元来コンクリート製品中心の展示会でコントラク

ターが販売対象となる。年々規模が拡大し、今ではその範疇(はんちゆう)を超えて、広く建設機械が展示されるようになってきている。コンクリート道路も多い米国ではロードフィニッシャーなど我々の製品規模からすると遥かに大型に見えるものも展示され、屋外では盛んにデモンストレーションが行われていた。三笠も日本国内の総代理店となっているホワイトマン社製搭乗型トロウエルなどは専任者のデモンストレーションをするのみならず、ユーザー自らが実作業を想定して運転する光景も見られた。屋内外の会場では入場者で賑わいARAショーとは明らかに異なっており、その人込みを掻き分け一通り小間を回っているとさすがに足も棒になる始末で、あらためて展示会見学は体力を必要とする。

2日目は朝から雨模様であったものの、帰る頃にはすっかり止んでしまい集めたカタログ類の重さを感じ、重い



ARA商品展示風景

足をひきずりながらホテルに戻る羽目となった。

初めてのWOCの印象は新鮮で、客層も違えば、熱気も違っていた。各セールスマンの対応にも余裕が感じられる。ここはラスベガス。開放感が違うのであろうか。

一説によれば、米国東部の人間は西に行きたがる。しかし、西部の人間は東に行きたがらない。特にラスベガスという地域は誰もが行ってみたいとなる場所であり、私が2年前に訪れた時にも増して新しいホテルが建ち、新たなアトラクションが加わり、来訪者を飽きさせないものがある。夕食の後に新築のホテルベネチアンを探索する事になった。暗くなると眠くなると言う人間の本能を逆行させるように、そのショッピングアーケードの天井には青空が映し出され1時間ごとに一日が人工的に再現されていく。その中心部には、100mにも及ぶ人造の川が流れ、そこはまるでベニスのごとく(TVでしか見たことはないが)ゴンドラが観光客を乗せ漕ぎ手がオペラの一節を謡っているのではない。そして音響効果のすばらしいそのスペースで遅い終わるや

どこからともなく喝采の拍手が響く。今度は結婚式を挙げたばかりの新郎新婦が乗り込み、ゴンドラが又漕ぎ出される。なんとロマンチックなひとときだろうか。

ラスベガスには世界がある。ラスベガスのそれぞれのホテルを訪ね歩けば、数日間の滞在で世界一周旅行をしているような気持ちになる。まさしく夢を売る町、それがラスベガスである。

来年のARAショーとWOCはいずれもニューオリンズで時期をずらして開催される。新たな発見とその期待感で待ち遠しい思いである。今回は新製品を持って展示会に望みたい。今回の展示会では競合各社の製品群を

見ても一歩抜きん出た商品を見つけられず、どこも次のアイデアに苦しんでいる様子がうかがえる。今度は我々が市場をリードする番かも知れない。新しいアイデアが、市場全体の活性化を生み、建機市場の発展に繋がる筈である。

最後になったが、WOC会期中に販売重点商品の一つであるMVH-702 DSRC大型前後進コンパクター2台がアラスカのレンタル会社向けに追加注文となった事をここに付記して置きたい。又、今回の出張でお世話になったマルチクイップ社社員の方々や関係者の皆様に、紙面を借りて深く感謝申し上げます。

海外営業部一課 田島記

明日も元気でやろうじゃないか

さて、今年も恒例の初午祭。稲荷くじが参会者を悲喜こもごもに分け、直会の宴も極まる頃、たまたま目の前に坐っていた大沢相談役に「三笠社歌、三笠ばやし」について質問してみた。

私が三笠に関して半世紀、噂には聞くがまだ耳にした事の無い歌である。

「あっ、そうだ懐かしいなあ、ひとつ歌おうじゃないか……！」と言うことから「さあさ踊ろよ初午さまだ……」と大合唱が始まった。

作詞者酒井良之佑氏は元館林市役所総務課長を勤め、すでに故人になられた由。



大沢氏も炭取締役も昔はよく歌ったものだが、今の若い社員は……？と言う。

軽快な旋律も三笠の若さがあふれて心地良い。時には歴史をたぐり寄せ、原点に立ってみるのも……

(永井 記)

三笠ばやし

酒井良之佑 作

- 1 三笠ばやしで手びょうしとれば
そろたそろたよ笑顔がそろた
さあさ踊ろよ 初午さまだ
ほんに三笠は ほんに三笠は
すてきだね (くりかえし)
- 2 三笠ばやしで一声上げりゃ
可愛いあの娘のえくぼが笑う
聞かせやりたやー自慢の節を
- 3 三笠ばやしで心もおどりゃ
花も舞います 三笠の上に
チラリチラチラ ホラ花吹雪
- 4 三笠ばやしで踊ってふけりゃ
とけてうれしい まん丸月夜
明日も元気でやろうじゃないか

巨木をたずねて

もしかしたら、生きものの中でいちばん長生きするのは樹木かもしれないぞ？……こんな凡人が感じたことだからアテにならないけれど、近年もっぱらそう自分で信じている。

木と対話する、なーんていうと気どり過ぎだから「木を見る」といおう。木を見るなら大きいのがいい。巨木を見ていると何となく気持ち良く圧倒され、心の底から洗浄される気分になるから楽しい。ときには息も絶えだえの木の塊みたいな老巨木にも出会うが、それはそれなりに見事だ。

いつか国道153号線をドライブしたとき、長野県最南端という過疎で閑静な根羽村という村で『月瀬の大杉』というのを見たことがある。人影ひとつない山の部落だが樹下の祠や小広場周辺は誰か人の手で清掃されていた。遅く太いその幹に触れてみる。のけぞっ



て仰げば濃緑鬱蒼。老いを知らぬ樹勢。あまりの偉大さと神々しさに思わず拝礼してしまった。樹齢千八百年。天然記念物の表示説明板にはっきりとそう記されていた。

なぜか樹齢の数字を見ると嘘くさい気がしてならない。名高い屋久島の縄文杉は発見当時「樹齢七千二百年」と新聞報道された。その後、科学者の間から疑問が提出されたとかで、綿密な調査の結果「約四千年」に変更された

マイバードウォッチング

平成10年4月、トラフズクの写真を本紙に掲載してあれから丸三年。バードウォッチングの深みにますますのめり込んでいます。いまや三百五十余种の野鳥識別が出来るようになりました。長く夢に描いていたアカショウビンそしてサンコウチョウの姿も目にして撮影に成功。最近ではITのお陰でリアルタイムの情報が得られるから、以前のように重いカメラ一式担いで空振りのまま帰宅ということは少なくなりました。それよりもむしろ怖いのは天候不順、交通機関の乱れだと言えましょう。

野鳥観察の噂は高いのに、その成果写真をちっとも見せてくれない……と言われてしまったけれど、わたしは出し惜しみしているのでは決してありません。職場に自分の趣味を持ち込まないよう少々自粛しているだけです。それでは、晴れて今回ご覧いただくには何がいいかなあ……

写真はヨシゴイ。これは国産のサギのうち最小といわれる夏鳥で沼や



池のヨシやマコモの中に巣作りし、外敵が近づくと実に驚くほどみごとな擬態を演じます。首を細くのばし、くちばしを直立させ、細い脚でヨシそっくりに見せるから、ただもう感動するほかありません。撮影には大変苦心します。友人からの情報で、鳥がどこにいるか特定できていてもいつ出現するのかは鳥の気分次第です。現場到着後1時間以内にシャッターを押せるケースもあれば、あきらめて帰宅後に出現することも多々あります。

バードウォッチングには季節感覚が磨かれる喜びもあります。まもなく五月。愛鳥週間が始まります。野鳥観察にお出かけになりませんか。

(海外営業部・加瀬)

三笠俳句天国

『穂波句集』抄

うき蝶のおりおり来てや見あざみ
土筆野や女の連れのくぐれがち
揚ひばり新家の嫁の顔見て来
哨兵の眠気さそうや遠かわづ
早春の岸を流るる薄氷
お花見の判官酔うてねまりけり
春の川ささやきながら流れけり
春暁や埒なく夢に夢を見る

菜明りに野遊びの下駄洗いけり
木の芽寺木魚ぼくぼく陽が当たる
霞む日や象の眼のありやなし
ライオンの檻を覗けば春雷す
白熊は上野の花も知らぬらし
春暑し押されて覗く河馬の口
蝶飛ぶやキリンの首のいや長き
……
募集 あなたの俳句・川柳などお寄せください。本欄で発表ご紹介します。

ものだから、あれ以来樹齢はあまり信用しないことにしている。数字なんてどうでもいい。樹木は寿命が決まっている人間と違って、条件さえそろえば永遠に生き続けるのだと思う。

地下鉄大江戸線の築地市場駅で降りて浜離宮の「三百年の松」を見にいった。六代將軍家宣がこの庭園を改修したときに植えたと伝えられる黒松で、都内では最大級だという。入園料300円はシルバーゆえに口ハ。有難く通行してまもなく左手に「三百年の松」は姿を見せた。がっちり肥った根本から二股にわかれて、一方は天に向いて伸び、一方は南に向かって地を這うように枝を伸ばしている。幹のすべてに黒いしゅろ縄で保護の藁が巻かれているから、タイツ姿のバレリーナまたは体操選手が開脚倒立している姿を思わせた。なんとまあエロチックな……と感じたのは当方が近年とみに卑猥な目で物を見るようになったからだろう。さらには伊藤晴雨が描く女体緊縛図まで連想するに至って我ながらほとほと呆れ返ってしまう。

全身保護を受けているだけに「三百年」の松葉はつやつやと輝いて、老いの影などまったく見当たらない。この巨木、四百年、五百年と時が過ぎても「三百年の松」の名称で通すのか。名付け親は自己満足しているだろうが、人生の尺度だけで考えた大きな誤りに気付かねばならないだろうなあ……。それともすでに故人、あの世で気を揉んでいるかもしれない。

特別名勝・特別史跡、浜離宮恩賜公園。東京にもこんなどこかで景色の良い場所があるのだ。アスファルトジャングルなどと悪口ばかり言ってはならない。お花畑、潮入の池、鴨場、將軍上がり湯、水上バス発着所などなど、散策にことかかない別天地だ。真っ盛りの菜の花畑には蜜の芳香が濃くただよっていた。「三百年の松」にもとどく春の香りだった。

